

島木赤彦における子規

宮 川 康 雄

一

島木赤彦は写生派の巨匠として、また歌誌『アララギ』の主宰者として、近代短歌史に重要な役割を果たした。赤彦がそのような歌人となりえたのは、しかし写生派の始祖正岡子規に負うところがきわめて大きい。というよりも子規から摂取したものを考えることなくして赤彦を論ずることはできないといわなければならないであろう。しかるに、写生説に関するものを除けば、これまでこのことに関する考察は、殆どないといってもいいのである。本稿ではそこで、赤彦が子規から何を、どのようにうけ継いで歌人として成長していったかという問題を中心に赤彦と子規との関係について考察を加えてみたい。

赤彦が子規と関係をもつにいたったはじめのできごととして知られているのは、明治三十三年、子規が新聞『日本』紙上に「森」という課題で短歌を募集した際に、これに応じた

藍毘風（アヲハツ）の林の中に光満ちてもありたまひし釈迦牟尼ほとけ

という一首の歌を選ばれたという一事である。けれども、これを両者の関係のはじまりとするについては、若干注釈を加えておかなければならない。というのは、これ以前、明治二十九年に、彼はすでに伏竜の号で『青年文』に新体詩を発表しており、子規から「つまみ」（伏竜）は題目のむつかしき割合に面白く作られたり（『文学』

明治二九）と賞讃されているからである。ただ「つまみ」は新体詩であり、かつ子規の評を受けることを予想することなく投稿したものがたまたま子規の目に触れ批評をも受けたものであるのに対して、「森」の方は、子規との関係を考える上ではより重要な和歌である上に、子規の選をうける意志をもって投稿した作品が希望どおりに選ばれたもので、その点で「つまみ」の場合とは大きくちがっているといえる。そこで赤彦と子規との関係のはじまりを「森」の一首におくとするならばそれはこのようなちがいを認めるからのこととなければならない。

赤彦が『日本』に投稿したのは、おそらく、同紙上における子規のめざましい活動に刺激をうけたためであったであろう。子規は、明治二十五年に大学を中途退学して日本新聞社に入社して以来、俳句革新のために全力を注いできたが、その仕事が一段落したので、三十一年の二月、「歌よみに与ふる書」を発表、写生主義と『万葉集』の尊重とを旗印として年来の宿願であった和歌革新の仕事に乗り出したのである。当時『日本』は長野県下に広く読まれていたというから、この子規の主張は、赤彦の耳目にも当然触れたにちがいない。しかし、長野師範学校に在学、附属小学校で教生としてきびしい訓練をうけていた彼には、子規の主張に共感を覚えたとしても、それに充分な注意を払うだけの時間的なゆとりはなかったであろう。教生の期間を了えたあとも、ただちに卒業、かねて約束のあった諏訪

郡下諏訪町の久保田家の養嗣子となり、政信の長女うたと正式に結婚、北安曇郡池田小学校に訓導として赴任した。そして、まもなく六週間現役で高崎連隊に入営し、そこから戻ると中等教員の検定試験を受験するために準備にとりかかるというふうに多忙な日々を過ごしていた。その上にこのころの彼は、教育に熱意を注いでいたのであるから、子規の革新の主張について研究をしたり、またその運動に参加したりするほどのゆとりは、やはりもてなかったものと考えられる。とはいっても、彼は子規の活動に無関心でいたのではなかった。それに相当の関心をもちその活動に注目していたことは、彼自身述べていることから明らかであるし、またたとえば、教え子の死を悼んだ「弔生徒北条伝死歌並反歌」(明治三三)という作品が、それまでの作品と異なっていて、万葉調の歌になっていることなどからも推測されるのである。けれども赤彦の子規への関心は、この間の作歌数がきわめて少ないところからみても、いまだただちに実作へと彼を赴かしめることはなく、彼はその坪をでて積極的に作歌活動に励むことはなかったのである。ところが、妻と別居までして全力を挙げて取り組んだにもかかわらず、検定試験をうけた結果は、ついに失敗であった。このため氣おちしたが、彼は同時にこのことから、これまでになく時間的なゆとりをもつことができるようになったのである。子規が革新活動の一環として全国に和歌革新の主張の趣旨を徹底すべく課題短歌の募集をはじめたのは赤彦がまさにこのような状態にあったときであった。その活躍にかねて関心を寄せていた赤彦は、そこで、子規が「森」の題で二回めに短歌を募集するとこれに應ずる氣持になり、十四首の歌をつくって『日本』に投稿したのである。

応募した際の赤彦の氣持は、相当自信に満ちたものであったらし

い。「子規先生が日本と言ふ新聞で森と言ふ題で、歌を募られました。子規先生の歌は其の頃から非常に好きでありましたから、立所に十四首の歌を作って子規先生に送りました。今から考へれば実に大胆なものであります。(中略)心の中では十四首の中で、少くも七八つは屹度採られる。子規の眼鏡に叶ふ、斯う信じて居りました。」(「歌道座談」講演)大正二一、一〇)と、後年満洲で行った講演のなかで彼はいつている。長い年月を隔てたあとの講演であるから、あるいは多少正確を欠くところがあるかも知れないが、これは当時の彼の氣持をほぼそのままにあらわしているものとみてよいのではなからうか。このような自信をもって投稿したものであったにもかかわらず、しかし、採られた作品は、前述のとおりただの一首だけであった。それはむしろ当然であったといえるであらう。子規はその写生主義の立場から、短歌を募るにあたって「実際に森を見森を行く時の景色感情を詠むべし。」(「再び短歌を募る辞」と要望していたのに、赤彦の作品は、選ばれた一首から推測するに、要求とはかなり隔ったものであったにちがいないからである。すなわち子規の主張に共鳴し、活動に関心をいだいてはいても、赤彦の子規への理解はいまだ皮相のものにすぎなかった。彼は子規の主張を正確に捉えようとどこまではいったっていなかったのである。

赤彦はまったく予期していなかったこの結果をみて衝撃をうけた。しかし同時に彼は、このことから大きな教訓をうけとったのである。「自尊心が傷つけられたと言ふやうな氣が致しました、同時に子規に大きな槌で頭を食らはされたやうな氣が致しました。」と彼はいい、それから、「是は俺は勉強せねばならんと窃に勉強」をはじめたといっている(同上続き)。

二

赤彦が子規への関心をいっそう深めることになったのは、明治三十三年五月、郷里諏訪郡の玉川小学校に転勤し、岩本木外と同僚となって、木外からしばしば子規の話を書くようになってからのことであつたと思われる。木外は日本派の俳人で、『諏訪文学』を主宰し、活発な文芸活動を行っていた。玉川小学校時代の赤彦は、この木外の影響をうけ、池田の時期には教育に注いでいた情熱を、次第に文芸作品の創作へと向けるようになるのである。

三十三年の暮にはすでに『諏訪文学』の和歌の選者としてあらわれた赤彦は、『和歌漫語』と題する評論を同誌に発表して、その命脈の存在をも疑わしめた俳句が、近來根岸派一派の革新によつて生々たる活気を文界の一隅に現出したことを述べ、和歌の革新が俳句の革新に遅れていることを指摘したあとで、新旧両派の歌人について、次のように貶評している。すなわち、御歌所の歌人について「彼等は到底文学なる意識をだに解釈し得ざる盲詩人」であると評し、その作品を貶し、ついで今日では大勢はすでに新派と称する一箇の見識を具えた立派なる歌人の上に移っているからその方面に向つて少し意見を述べるといって、新派の急先鋒となつた与謝野鉄幹の『東西南北』が新派歌集のさがけをなした功績を認めながらも、鉄幹を、「彼は才氣に勝つた所があつて、却つて研究の態度を缺如して居る」「矢鱈に新奇を求めて少しも詩美を捉へて居らぬ。」と評し、また、萩の舎（落合直文）について、「氏の新しいと称するのは、単に用語取材の上に存するので、想は依然として旧時代である。」とか「新旧両派の合の子」とかと評し、さらに佐々木信綱についても、根柢は大の旧思想である、といつて、きびしくこれを批判しているのである。

る。赤彦のこうした批判が根岸派と同じ立場に立つところからくるものであることは改めて指摘するまでもないであらう。彼は子規の忠実な弟子となつて、子規の和歌革新の運動にすすんで参加しようという姿勢をもちはじめたのである。

実作の上でも子規に学ぼうとしていたことは、子規の「ベースボールの歌」（明治三二）の模倣作といつていい「野球」（明治三四）という作品によつて知られる。

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬか
も
ますらをの庭の遊びにふさひたるベースボールは見れどあかぬ
かも
（子規）

久堅の亜米利加をのこ敷島のやまとをのこと球争ふも（赤彦）

なか／＼にうちあげたるは危かり草行く球のとどまらなくに
（子規）

打上げのhighボールの庭をこえて草野に入りしはるけき行衛
（赤彦）

明治三十五年九月に子規が歿したときその死を悼んで、

呉竹の根岸のさとに鶯の来鳴きはすとも君歌はめや
いませりし病の床に一度もはべり見ずして今ぞくやしき

打日さす都を遠みみずかる信濃路にゐて徒らになげく

など「悼子規居士追善」の歌を詠んだが、子規の死を境にして、赤彦の文芸活動は新たな時期を迎えたように思われる。新派歌人の歌会つばな会（津波奈会）を同年の暮に組織したのに続いて、翌三十六年の一月、『氷むろ』（『比牟呂』）を創刊、これに多くの作品と歌論

とを発表するようになった。八月の「眠に触れたる和歌を評す」という評論で「現今に於ける我短歌界の病弊」は「写実の缺乏である。」と結論しているのは、写実主義の立場を「和歌漫語」のときよりも明確に示したものと見て注目される。「氷むろ」よりやや遅れて同年の六月には伊藤左千夫によって子規亡きあとの根岸派の機関誌として『馬酔木』が発刊されたが、彼は創刊以来読者となり、やがて同誌にも参加していよいよ活発な活動を続けた。

上諏訪町の高島小学校に転勤した明治三十七年の秋に、直接子規に師事した伊藤左千夫を諏訪に迎え、左千夫から子規の話を聞いていっそう子規への理解を深めることができた。翌三十八年一月の「短歌小観」において子規のすぐれた点として「趣味の觀察が実に多様な事」を挙げて、その歌が「特別に頭の中から湧き出したるもの」ではなく、「すべての觀察が歌的なりし」ところから生まれたものであることを述べて、「竹の里人は明治の歌壇に於ては最も進歩せる成功せる人なり。」とまで称揚している。むしろ歌作における技術的方面にも留意していたのであり、たとえば、「一首中の主位を占むるものは、多く第四、五句にありたし。初句重くして、末句軽きは尻抜けの感ある事多し。」といい、「此の事は子規先生もかつて説かれたりと思ふ。」(同上)と附言している。

子規に傾倒した赤彦は、長い間用いていた山百合の筆名も柿の村人と改めた。この号が養家のある下諏訪町の高木の村(部落)に柿の木が多く植えられているのに因んだものであることについてはかつて記したことがあるが、さらにいうならば、こう号したのが、上京左千夫の家を訪問、一泊して共に根岸の子規庵を訪ね、子規の母堂とも会い、左千夫から子規の書簡一通を貰って帰郷した三十八年の六月下旬から程ない時期に発行された九月号の『比牟呂』からであ

ったことからみても、これが自分の居住する根岸の地が「呉竹の根岸」などと歌に詠まれるところから竹の里人と号した子規に倣ったものであることが推察されるのである。赤彦は子規に倣って「柿の村人」を筆名とし、子規のひらいた写実主義の道を歩もうと決意したのである。

このような赤彦が、子規と作歌上のゆき方を異にする者を否定するのは当然である。彼の態度は他派の作者に対してだけでなく、根岸派の人びとについても同様であった。根岸派の中心人物であった伊藤左千夫が新たな傾向をみせはじめたのにも不満を覚えて、子規を継いで平明な客観的写実をおしすすめて歌風の展開をはかろうとしていた長塚節に向ってそうした不満をかき送っている。その手紙に挙げた四項目の不満のなかの二つで左千夫を子規と比べて次のように評している。

一、觀察スベテ神仙的(ウマキ用語ナシ)ニシテ日常生活目前ノ事柄ニ感興ヲ起サンメズ正岡先生ナドト大ニ異ル所也一体左千夫先生ニハコノ癖あり。近來益々甚シ正岡先生ノ歌は目前卑近ノ材料ヲソノ儘トラヘテ尽ク詩ヲ成シテ居ル松ノ葉ノ露ノ歌藤の歌ソノ他スベテ然リ

一、馬鹿ゲタ所ナシ 妙ナ用語ナレド左翁近來ノ作皆ガ利キ過ギ
テイル正岡先生ノ「四国ノ猿ノ子猿ゾ我ハ」「我ニゾタビシナ
マリ五ツ」ノ如キ何デモナク馬鹿ゲテイテ皆面白シ

(長塚節宛書簡 明治四〇、五、七)

明治四十一年三月限り赤彦は教職を退いて養鶏の業によって生計をたてながら専心作歌に励むことを決意し、

呉竹の根岸の大人の歌玉はあがかしらべにとはに光れりと詠み、高島小学校を退職する。そしてこれまで選者をしてきた

『南信日々新聞』のほかに『長野新聞』の短歌欄をも受持ち、「彼岸趣味を信州山国に鼓吹」(両角福松宛書簡 明治四〇、二二一〇)せんとして同紙上で課題短歌の募集をしている。この募集の際における彼の態度をみると、子規に倣おうとしていることが明瞭である。すなわち『南信日々新聞』の新年の募集には多くの応募歌があったにもかかわらず、これを標準に叶わぬものとしてすべて捨てている。また同年三月『長野新聞』に掲げた「課題選歌につきて」という文章をみて、「応募歌中余の採り得ざりし者につき、一二の愚見を述べて諸君研究の材料に資せんと欲す。」¹⁾といって、「月並的傾向を有するもの」という項において

すはの湖風なき日にも奇しきかな氷の上に人の波打つ

の歌を挙げて、「氷の上に人の群れたる様を詠まんとならば、其の物の面白しと感じたる様其の儘を直截に緊密に的確に歌ふべきなり。」と記している。前者は課題「森」における十四首の赤彦の投稿歌のなかからただの一首を採っただけであった子規のきびしい態度を思いおこさせるものがあるし、また後者は「森」の募集のときに子規が応募者に要望していたことばを思いおこさせるものがある。

養鶏の仕事にしがっていた四十一年の十月、『馬酔木』の後身の『アカネ』の編集を担当していた三井甲之と左千夫との確執から『阿羅々木』(『アララギ』)が発刊された。赤彦がこの創刊号に発表した「分水荘の歌」は、新しい境地をひらいた連作の歌であるが、この作はじつは杜牧の「阿房宮賦」の翻案であった。漢詩文を和歌や俳句に翻案することは、和歌・俳句の内容を豊富ならしめるものとして、子規が「杜甫石壕吏」(明治三二)「杜詩新婚別」(同上)などで試みていたところである。この「分水荘の歌」も子規に学んでえた作品であったといえる。

三

明治末年から大正初年にかけての赤彦は、激動の一時期を過ごした。養鶏の仕事に失敗したことから教職に復帰せざるをえず、明治四十二年の春に友人の東筑摩郡視学湯本禿山の世話によって同郡の広丘小学校に校長兼訓導として赴任した。二年の後には玉川小学校に校長として移り、さらに諏訪郡視学に推されて同郡の教育の改革に力を尽したが、広丘にいたときに芽生えた中原あつち(閑古)との恋愛の苦悩から逃れるため、伊藤左千夫の歿後『アララギ』の編集を担当していた古泉千樞の怠惰から遅刊続きとなっていた同誌の編集の任にあたり、その再建をはかるために上京、私立淑徳高等女学校に教鞭をとりながらその仕事に従事した。しかし内面の苦悩は容易にやみがたく、ついに遠く伊豆の八丈島に渡り、ここによりやく落ち着きを取り戻して、「危くすれば狂的になりはせぬか」(中村憲吉宛書簡 大正三、一一、四)とまでみずから危惧していた状態からようやく脱し得て、「少し熱病のさめし心地して」(長塚節宛書簡 同、二二、二)帰ってくる。以来彼の態度は一変し、「来年よりは専門に勉強可致候到底現代人を相手に仕事は出来ず況や現時をや我々は一生かかりでどれ丈けの歌を得べきや多少特独¹⁾の光彩を放つもの十首以下あれば欣喜満足可致候小生等の仕事は実に是れからに候」(両角波雄宛書簡 大正三、一一、三〇)と、今後への抱負と決意とを述べるのである。

作歌活動の面においてもこの間は、いちじるしい転変の跡をみせている。広丘小学校に単身赴任して森林中の孤村に瞑想的な日々を過ごすうちに新しい抒情的な作品を生みだすが、玉川村の時期のかわりごろから、乱調を呈し、またゴッホやゴーガンなど後期印象派の

絵画の影響をうけた感覚的な歌風へとうつっていく。師の伊藤左千夫との作歌上の考えの懸隔はさらに増し、左千夫の死まで相許すことがなかったけれども、左千夫の歿した大正二年七月に第一歌集『馬鈴薯の花』を刊行したのを機会に筆名を島木赤彦と改め、続いて大正四年三月第二歌集『切火』を上梓して、ますます歌作に意欲的な態度をみせているのである。

赤彦はこのような自分の変化を肯定しようとしていた。『信濃教育』に掲げた「和歌の傾向」(大正三、一〇)という評論のなかで、「明治時代が体慾時代、官能時代に入ってきたといふ事は、善惡に拘らずやむをえない勢力である。夫れを防止するといふならば第一に科学の輸入と研究とを防止せねばならぬ。」といい、「科学の光に只管随喜する人士が、体慾や官能の方面に専念帰依しつつある衆生を見て、心配してゐると言ふことは滑稽な事である。」とまでいっている。こうした赤彦において、今や子規ふうの平明な写実はかげをひそめて、彼は子規が是非を争おうとして以来敵視してきた与謝野鉄幹らの新詩社の歌風に対しても、「兩者の間に以前に比すれば余程近似的の点を持ってきてゐる」ことを認めて、これを容認しようとする態度をさえみせているのである。子規はもはや作歌の上で規範となるものではなくなった。それは「今後更に幾変化すべき前途を有する我々の歌が、常に子規先生当時の根本的精神を忘れぬ用意が肝腎である」といっているように、和歌改革の根本精神が強調されるにとどまるものとなってきたのである。

赤彦はしかし、やがてこのようなところから離れて、新たに独自の歌風の樹立へと歩みをはじめることになった。その転回点となったのは、さきの大正三年の秋の八丈島への渡島であったといつてよい。彼が島に渡ったのは、中原あつゝとの恋愛に起因する精神的な苦悩

のためであり、「半永住のつもり」(横山重「久保田先生」)であったともいわれるほど悲愴な決意をもって実行したことであったが、島では生計をたてる道を見出すことができず、同時にしかし彼は、自分のゆくべき道を芸術上に見出すことができて帰ってきたのである。

再出発する赤彦の拠り所となつたのは、『万葉集』であるとともに子規であった。前引の両角波雄に宛てた書簡で、続けて「今日にては万葉集の何処を開き見ても吾人は圧倒されてしまひ候」と述べるとともに「小生只今子規先生の俳句を見て居り候へ共とても我々現代歌人の百歩千歩先方を歩み居らるる心地致し候斯る光輝を知り居る我らは幸福と信じ居り候。」といい、「天下の人余り悠長に構へ候はゞ大事去るべく候天下の人余り気短に急ぎ候はゞ大事破るべく候と先生は申され候有難き先生を我々は有し居る事を深く思ひ候」と記している。このような彼も、しかしながら『切火』においては自分のつかみえたものを、まだ作品の上に充分生かすことはできなかった。

赤彦の歩みは、大正五、六年ごろになると、足どりの確かなものとなった。大正五年九月号の『アララギ』に「雛燕」の連作が発表されたとき、中村憲吉は、「歌調が締って来た事」と「事象をつかむ圧力。技巧が殊に確実になったと思はせる」ことを指摘したが(『赤彦の歌を評す』大正五、一〇)、この作のあたりから作品は次第に深みを増し、やがて独自の歌風の樹立をするにいたるのである。時あたかも歌壇には流れの転換がおこっていた。明治末年から大正初年にかけて西洋化の方向をめざしていたかにみえた流れがいつしか向きをかえて、東洋に還流しようとするかのごとき動きを示していた。かつて他との交流を積極的に求めていた歌人たちは一転しておのおの結社のなかに籠り、おのれの立場を固めることに全力を注

ぐようになっていた。『アララギ』においてもそれは同様であり、大正四年の二月号から同誌の編輯兼発行者として責任を負うことになっていた赤彦は、『アララギ』の立場を次のように述べている。

「アララギ」は聖者ならざれば、未だ清濁併せ容るるの器容を備へず。古に求めて万葉集を宗とし、今に会して子規先生の遺業を紹介るに之れ急なるのみ。他を顧るの余裕なし。

（『アララギ』「編輯所便」大正五、四）

子規先生は鉄幹是ならば子規非なり子規是ならば鉄幹非なり兩者並称すべきにあらずと公言してゐますアララギの頑固な気質は子規先生の時から根ざして居ります。（只子規先生の確信と小生等今日のものの頑固とは同一に論ずるは不可併し伝統は自然りと存じます）そして小生等は是非か知らねど他流とは截然異つたものを守つて居ます（中略）此或物はアララギの盛否に係らず小生等は終生放棄せぬ覚悟です

（山田邦子宛書簡 大正五、五、二八）

さきに与謝野鉄幹ら新詩社の歌風との接近を認めるかにみえたのと比べると、赤彦の態度に少なからぬ変化のあることが観取されるであろう。彼は新詩社をはじめとする他派と『アララギ』の立場とが子規以来一貫して截然と異なるものであったことを強調し、その伝統を守り抜く決意を表白しているのである。

このような赤彦の態度は当然他派との摩擦をもたらししたが、しかし彼はそれをおそれてはいなかった。むしろそれらの人びとに向つて積極的な論争をいともうとする姿勢をさえみせている。その応酬にあたって必ず子規に言い及んでいるのは、子規の存在が彼のなかで改めて大きな意味をもってきていることを示すものであろう。たとえば、前田夕暮に向つて歌の調子を説いては「氏（筆者注、夕暮を

さす）の評釈してゐる橘曙覧の歌に対して子規先生が「曙覧は歌調を解せず」と論ぜられた条（子規随筆続篇三五八頁）、其の他子規随筆以来、左千夫其の他の人によって論ぜられた歌の調子の意義を研究し給へ。」（前田夕暮に与ふ）（大正六、二二）といい、三井甲之が作歌は必ずしも文法論に拘束さるべきものでないことを力説したのに対しては、「斯様な論は今更氏に依つて事新しく聞かざるべき議論ではない。真剣な作歌の経験の有する人の皆了知してゐる所である。子規なども平気で文法を破つてゐる事がある。」（三井甲之氏の辨駁文に就て）大正、六六）などといっている。

この間、斎藤茂吉とならんで「写生」についても新しい見解を表明するようになった。大正五年三月号の『アララギ』において「吾人の写生と称するもの、外的事象の描写に非ずして、内的生命唯一真相の捕捉也。表現也。写生の要諦斯の如し。」（編輯所より）と自分「写生」についての解釈を明白にしている。こうした見解に対しては、写生が一般にスケッチとはば同義に解されているところから、生命を盛る芸術を写生主義の名で唱えるのは我儘であるとか、または写生主義の鼓吹は啓蒙運動であるとか、というような非難や批判が他派からあびせられた。しかし、彼はそれらの人びとに向つて、写生は支那の画論に発して日本に伝わり久しい間に新たな領域が開拓されてきたものであり、自分の用法も決して恣意によって写生の語義を改竄したものではないこと、また写生主義の提唱は単なる啓蒙運動ではないことを説いている。そして、「之を初めて文芸上の運動に持ち来して新しき生命の開拓を標示し、且夫れを実行したのは子規である。」（「写生道」大正七、五）といって、自分の写生が子規のそれをうけ継ぐものであることを明らかにしている。このことを明白にすることによって赤彦は自分が子規の正統の後継者である

ことを内外に認めさせようとしているかのようにもみられる。けれども、このころになると、彼は、和歌を論ずるに子規の歌を例証としてひくことは多いけれども、作品の上で影響をうけることはなくなり、子規を写生派の始祖として仰ぐべき存在、もしくは精神的な拠り所として遇するようになってきているように思われる。

赤彦は大正六年に淑徳高等女学校を退職して信濃教育会の機関誌『信濃教育』の編集主任となり長野県教育界とふたび密接な関係をもつようになる。学校教育の方面についても多くの発言をするようになっていくが、就任以後毎号同誌の巻頭に掲げた論説において、自分の教育に関する信念を披瀝するに際して、つねに子規に言及するところがあった。このことは彼の子規への傾倒が、単に作歌上のことにとどまらず、子規の全人格に対するものであったことをよく示しているであろう。たとえば、「一心の道」(大正五、六)において、吉三に逢いたい一心から放火をして焙刑に処された八百屋お七のことを記したあとで、「子規先生は、お七のこの時の心を考へれば、いぢらしくて／＼堪らないと云はれてゐる。」といい、また、「犠牲」(大正七、一二)においては、およそ新しい思想には必ず幾多の犠牲者を生ずるものであり、それらの人びとの犠牲的精神の威力が人を動かし、時代の人心に生くるものであることを説いたあとで、「子規も大なる犠牲者なり。大なる犠牲者の文学が後代の人心を支配するは宗教と異る所なし。」と記しているのである。

年ごとに『アララギ』の歌壇における勢力は強くなったが、中村憲吉が大正五年十月、家務をみるために郷里の広島県の布野村へ帰住したのに続いて、茂吉が翌六年十二月長崎医学専門学校教授として長崎に赴任するなど、『アララギ』の中核をなす同人の在京の者は少くなつていった。赤彦もまた家庭の都合で郷里に帰らざるをえ

ない事情にあった。しかし、彼は飽くまでも『アララギ』を守る決意を固め、ようやく育つてきた直系の門下というべき人びとの助力を得て、生活の本拠を郷里におきながらも、東京・信州間を毎月往復して『アララギ』の経営にあたつた。大正十年十月茂吉が欧州へ留学の途に上つてからはひとりで『アララギ』を背負つて立つ形となり、こうして、『アララギ』における赤彦の独裁体制というべきものがおのずとでき上ることになった。このころは石原純・古泉千樨・釈迦空など有力な同人も赤彦とあわず『アララギ』を去つていった。彼が晩年「鍛錬道」を唱えたのは、このような状況のもとにおいてであつた。その主張の実践はやがて安居会を恒例の行事としたことにみられるように、『アララギ』を歌人の自由な集まりではなく、苦行者の集団であるかのような観を呈せしめるにまでいたつたのである。赤彦はしかし、「私どもが尊敬してゐる正岡子規なども、この「鍛錬道」の極地に達し得た一人と考へてゐる。」(文芸と教育)大正二一、二二(講演)といっているように、この道をたどることに尊敬する子規の境地に達する所以でもあることを信じて、一向きに、そのリゴリズムに徹していったのである。

四

以上子規とのかかわりを赤彦の子規への言及を通して略述してきたが、明治三十三年子規の選をうけるべく「森」の課題に応じてから大正十五年に生をおえるまで赤彦がいかに多くのものを子規から与えられたかが知られたであろう。彼が子規からうけ継いだ写生主義と『万葉集』の尊重については改めていうまでもないとしても、そのほかにもさまざまな影響をうけ、そして彼はそれによつてみずから肥やしたのである。

赤彦が子規から学んだものは、時期によってちがいがあつた。彼ははじめ和歌革新の活動に刺戟をうけて子規に近づいたのである。

それから子規の唱えた写生主義と万葉尊重とに理解を深めるに及んで、子規の作品を作歌の範とするにいたつた。やがて情趣的・瞑想的なものに惹かれて子規ふうの客観写実を離れ、さらに時流に交わつて感覚的歌風へとうつると、今度は和歌の革新を主張した子規の根本的精神を尊重すべきことを説くようになる。八丈島から帰って自己の歌風を樹立するに及んでは写生派の始祖としての意義を強調し、晩年鍛錬道を唱えると、その体現者としての意味を認めるのである。その関係が長く続いたのは、このように学ぶべき対象を次々とかえていったためであるといえなくもない。

しかし赤彦が子規に対して上述のごとくであつたのは、彼が子規を尊敬していたからのことであつた。子規への尊敬——その人格への敬慕の念こそ赤彦を子規に緊く結びつけて離さなかつたものであつた。

子規先生病臥七年肉落ち骨瘦せ、寝返りだに自ら弁ぜず。脊髄の膿叢を押すや痛哭の声門外に徹す、而も手筆を措かず談文学を離れず。子規先生一代の文学は斯の如くにして生れたる者なるを思ふべし。先生の俳句を学ねぶはあり、先生の和歌を学ねぶはあり、先生の人格を慕ひ奮を発するの徒幾何ありや

〔「日曜一信」明治四三、一〇、九〕

このように子規の人格に傾倒したとしても、しかし赤彦の芸術が子規の模倣におわるものでなかつたことは、改めていうを要しない。両者の作品には、それぞれ独自の特色が認められる。そのちがいの由来する所以はさまざまであらう。子規は和歌革新に乗り出したころにはすでに病床にありそれから歿するまでには数年の寿命し

か許されなかつた。それに対して、赤彦は健康であつた上に子規よりはるかに長く作歌生活が続けることができた。子規の家族関係が単純であつたのに比べると、赤彦のそれは何層倍も複雑であつた。

赤彦は子規の経験しなかつた恋愛の苦悩をも経験した。このようなちがいが作品に反映し、その差異をもたらしていることは、もとより自明のことである。声調の上からみても、赤彦のそれと子規のそれとは相当のちがいが認められる。最晩年の赤彦が志向した幽寂境のごときは、子規にはついに無縁のものであつた。

赤彦が子規に傾倒しながらも、子規の模倣におわらず独自の歌風を形成しえたのはなぜであらうか。それは赤彦が自分の天性と境遇とを直視し、みずからの立場に立つて子規から摂取しようとしていたからであるといつてよいのではなからうか。彼の子規に対する傾倒ぶりは徹底したものであつたが、よく観察するに、その態度にはありのままの子規をうけ入れるというよりも子規を自分にひき寄せ、それに自分流の解釈をくだしているところが認められるのである。たとえば

日本に於て自然主義が文芸上の運動として称道せらるる以前にあつて、自然主義者の唱ふる所を實行したものは子規である。子規の生涯と其の作品を見ればこの事明瞭である。只子規は単なる自然主義を以て満足出来なかつただけである。

〔「鍛錬と徹底」大正八、一〕

といつているのなどにも、そうした傾向があらわれているといえるであらう。この場合は子規が対象を客観的に写すことを重んじたといふことからある程度認めてよいのではあるが、これが「鍛錬」を説くにあたつて、芭蕉とともに子規を挙げて、次のように述べているのなどになると、自己流の解釈がややゆき過ぎていく感のあるの

を否めない。

俳人芭蕉は「道ばたの木槿は馬に喰はれけり」といひ、歌人子規は「瓶にさす藤の花房短かければ畳の上に届かざりけり」というてゐる。両者を以て感激なき平凡の作となす徒の多いのは、冴えたる情、鍛へられたる力の極地する所に無頓着なるの多きを証するものである。（「鍛錬せられざる心」大正七、一）

さらに子規を鍛錬道の極地に達した一人として認めるようになる、明らかにゆき過ぎの感が深い。子規は強い人であったが、その強さは鍛錬によって得られたというよりも、むしろ生得のものであったと考えられる。天性強い人であった子規には鍛錬によっておのれの精神を鍛えるというようなことは、必ずしも必要ではなかつたのである。そうした子規の強さを、生来感傷性の濃い性情をおのれの弱点として克服せんと努めていた赤彦が、鍛錬の結果えたものとみたのは、成心をもってこれに対したものであるといふべく、いわば自己の理想をもって迎えたものであるといわなければならないであらう。

赤彦が子規の革新活動の態度を評して「正岡子規の俳句革新を唱ふるや、偏に芭蕉、蕪村を説いて自餘一切の月並を排す。蕪村もよし、月並も悪しからずと云ふにあらざるなり。其の和歌革新を唱ふるや、偏に万葉集を説いて八代集以下の流風を排す。万葉集もよし、古今集も悪しからずといふにあらざるなり。其の御歌所風の和歌を見ると、与謝野一流の歌を見ると、雙ながら一擲土芥の如し。」といい、その理由を「求むるもの深く存するが故なり。」（「容ざる心」）といっているのについても同様なことがいえる。子規が革新の主張をするに際して他を徹底的に否定排撃したのにはその効果を狙った充分な計算があつた。それは赤彦のいうように、「求むるも

の深く存するが故」であつたとばかりいうことはできないのである。

このようにみると、赤彦は子規の歌論と実作と人格とによって導かれたばかりではなく、自分の理想化した子規によって導かれたのであるといわなければならないであらう。彼は子規を思うことによって忍苦に耐え、みずから励まし、成長したのであるが、その子規は現実の子規というよりも彼によって多分に理想化された子規であつた。すなわち、いかに傾倒したとはいへ、主体は赤彦の側にあつたのであり、子規は赤彦の成長のための糧となつたに過ぎないといつてもよいのである。

赤彦が芸術を築くためには、しかし、伊藤左千夫のように多くのものを与えるとともに直接に師事したことから欠点も目につき、文芸上の争いをした師も必要であつたと同時に、まみえることがなかつたために、限りなく理想化することも可能であつた子規の存在がぜひ必要であつたのではなからうか。少くとも子規がいなかつたらば、赤彦の歌人としての生涯は随分ちがつたものになつていたであらうことは確かである。赤彦はまた『アララギ』を主宰するに ついても子規に負うところが多かつた。彼において子規への尊敬は実質を失つたことがなかつたとはいへ、晩年になると、ややこれを神格化している面があり、彼はそれによって子規の正統の後継者としての自分の立場を安定させて他派にあたるとともに、『アララギ』内部の統制をはかうとしたようにも見うけられるのである。歌人赤彦及び『アララギ』の主宰者赤彦は、このようにして子規があつてはじめて存在しえたのであり、この意味において、子規は、赤彦を赤彦たらしめたもつとも重要な歌人であつたといわなくてはならないであらう。